研究報告

小中学校教員の発音クリニック

――英語授業担当者対象の発音指導記録――

高村　博正　　吉田　三紀*

キーワード：英語　児童教育　発音　小学校　中学校　小中連携

はじめに

本稿は、大阪府下 A 市の公立小学校現場で子どもたちに英語を教える可能性がある教員と、同市の中学校の英語科担当教員に対する「発音クリニック」の指導報告である。同市教育委員会の主導で 20 名の小中学校教員を対象に「発音クリニック」を行った。発音クリニックについては本稿では概略だけを説明するので、この講習の基礎となる英語の発音に関する基礎訓練の詳しい方法と説明については、別途、拙論[1)]を参照してほしい。受講申込者数は合計 26 名であったが、実際の参加者数は 20 名――男性 10 名、女性 10 名であり、内、小学校教員は 16 名、中学校教員は 4 名であった。

本稿は 4 つの部分から成っている：

Ⅰ．小学校における英語教育の音声面の重要性
Ⅱ．発音クリニックの概略説明
Ⅲ．対象受講者の受講前の発音分析
Ⅳ．まとめと受講者アンケート

*東大谷高等学校常勤講師

Ⅰ．小学校における英語教育の音声面の重要性

この小中学校教員に対する発音クリニックは、平成 20 年 6 月から 11 月にかけて、途中 2 回の約 2 ヶ月のインターバルを挟んだ合計 3 回の講習である。結論から先に述べると、発音クリニックの主眼は、参加者の個々の英語発音の矯正というより、児童英語教育を担う教師自身の「ぶれない発音規範」の理解と実践（それが完全に実行できるか否かより、システム自体の構造の理解）を試みることにあり、その意味では所期の目的は十分に果たせた。

もちろん、わずか 3 回のクリニックで、それも「ネイティブ・スピーカー」と同等の英語発音でない日本人講師（筆者）の指導のもとに、英語教育経験の少ない小学校教員の英語発音が短期間に驚異的な向上を見せることができる筈がないことは当然である。したがって、今回の発音クリニックの目的は、各参加者が英語発音の基礎知識を知ることと、自分ができる範囲での自己発音矯正の実施と、自らの英語発音にたいする自信と将来への自己訓練の基礎を習得することにある。

小学校で英語を教える教員のほとんどは（当然、例外はあるにしても）英語の実力に不安を感じている。その不安の一部は英語音声面での実力

に関する不安であることは想像に難くない。また、中学校の英語授業担当者の音声面での能力と自信とは、教える生徒の音声面での指導の充実に欠かせることができないと同時に、生徒たちの高校・大学・一般社会での英語運用の基礎を作る意味で、英語教育の重要な一面を担うポイントである。これらの生徒に英語を教える現場の教員とその候補者である教育福祉学部学生の責任は重大である。

現在、大学で英語授業を受講している英語教員予定者の多くは、数世代前の教員とは違い、一般的に言えば音声面での訓練を十分に受けていると思われる。また、受けていなければ英語教員の資格はないと思わなければならない。現在の英語学習面での環境を考えてみると、半世紀前の状況と比較して、選択に惑うほど多様で大量で簡便なネイティブ・スピーカーの英語に触れる機会が増えている。当然、それらの学習・訓練・経験の蓄積の結果、多くの英語教員の英語発音は大きく上達している事実は否定できない。

実際、中学校の英語科担当者の初任者研修や10年研修において、アドバイザーとして発音面の重要性について担当教員の方々に説くと、ほとんどの若手の英語教員は、「現在の自分の英語発音で十分だと思う」と答えるのが普通である。しかしながら、先生方の自信には感心するけれども、自分の英語発音に対する自信と、その先生方の実際の発音の〈正確さ〉とに乖離がないわけではない。その点も含めて、今回の発音クリニック講座の結果分析をしたい。

したがって、この発音クリニックの目的はふたつに分かれる。一つ目は、現在着々と進みつつある「小学校での」英語授業の実態に大きく係わる音声面での担当者の問題意識の確認と改良点の理解とその対策である。二つ目は、「中学校での」英語科担当教員の英語発音の再確認である。その延長線上には、中学校での習熟度別英語教育のある面において、中学生の英語発音がさらに向上するという利点の他に、生徒指導の面において発音クリニックが効果をあげる可能性もある。中学校二年生時において、すでに、進度の速い英語授業についてくることが困難になっている生徒も少なくない。彼らにとってもはや不得意科目となっている「文法」面での英語指導を離れて、「無味乾燥な勉強」としての英語ではなくて、「英語を――外国語を――しゃべってみたい。発音してみたい……」という無邪気ではあるが当然の彼らの希望を鼓舞・サポートできれば、そして、それをきっかけにしてより効果的な生徒指導に結びつけることができれば、中学校での発音クリニックも補助的な利用価値があると思われる。この面での実践報告については別な拙稿を参照されたい[2)]。

小学校への英語授業導入について、筆者は中学校以前の段階での英語授業に大きな期待を（と同時に不安も）もっている。極端な話、中学校での英語授業の現状を考えると、小学校での英語授業は中学校英語の前倒しで良いのか否か、がまず重要な論点となる。それとは逆に、小学校での「理想的な」英語教育が試されるべきであり、その英語教育の成果がやがて受験対策のための中学英語教育――そしてその延長上にある高校英語教育、さらに大学入試のための対策授業、さらに大学入試そのものの変革の起爆剤になるのか――など、小中の先生方が実際に話し合いながら、より良い方策を共同で模索しなくてはならない時である。

一般に、小学校の教員に英語を担当させるということは、現状を見ると、非常に困難な仕事を現場の教職員に押しつける結果になっていることがすぐに理解できる。一番簡便な解決策は、自身が学習したり、能力を開発するより、専門家である中学校の英語科担当教員やA. L. T.（Assistant Language Teacher）たちに代わりに授業をしてもらうか、市販のDVDなどのAV教材を導入することである。が、それでは本質的な解決にならな

いことは明白である。

英語を担当する小学校教員たちは、すでに教師としての豊富な経験と、自分が担任をするクラスの子どもたちとの良好な人間関係を踏まえて、英語以外の科目での教育・指導を効果的に行っている。そういう場合でも、こと英語となると、ほとんどの教員は自分の担任クラスで英語を教えることに対して大きな不安を隠せない。自分に全幅の信頼を寄せている担任クラスの子どもたちに、自分自身が自信を持てない科目を教えなくてはならないからである。先生方の不安の原因は、3つ考えられる：

①何をどう教えてよいのか見当がつかない（教案の不安）
②A. E. T.（Assistant English Teacher）またはA. L. T. たちとどのように共同作業・交渉をしてよいのかわからない（使える英語力の不安）
③ネイティブ・スピーカーの発音と自分の発音の差異が大きすぎると思える（発音・音声面の不安）

が主な不安材料である。とくに音声面での小学校教員の不安感は小さくない。全小学校で年間40時間の英語の授業をすることになる東京都北区の教員たちの反応は、どうであろうか[3]。「英語を使って授業をするのは苦痛」と、半数の先生が答えている。この報告記事の概略は：

A先生は、「助けてくださる方いませんか。私の発音では……」であったので、保護者会に助けを求め、外国の航空会社に勤めたことのある保護者に授業援助をしてもらった。また、別な先生は4年生担当のB先生であるが、A. E. T. の授業ビデオを生徒に見せている。「A. E. T. の先生の発音をよく聴いて。先生の発音はよくないから。」と言う説明である。さらに6年生担当のC先生の場合、子どもに「2日」の英語発音が「セカンド」で良いか否かを訊かれたときに、「うーん、あとでCD聴こう」と対応したという。総合的に判断しても、同区の半数の先生方が正規の教科に英語を入れることに反対であった。

早期児童英語教育の是非については何度も論議されている。日本語自体が未熟な段階で外国語を学ばせるために、母語の習得に大きな弊害があると論じる立場や、さまざまな総合的な言語体験をすることで言語感覚が育まれるという立場や、「英語」という「覇権者の言語」に追随する態度を問題視する側や、逆にインターネットなど現代情報社会では英語なしには生きてゆけないと主張する人々も少なくない。上記のような「建前」の裏には、率直な意見として、教える側である日本人（またはアジア各国や非英語圏の先生）の「自分の英語の発音に不安がある」という気持ちが大きいことは事実である。この件に関しては、鳥飼久美子氏の意見が示唆に富んでいて有益と思えるので参考にされたい[4]。

実は、上述の東京都北区の教員の記事（英語の音声面で非常に不安になりながら小学校英語を担当している先生方の話）は、4年前の記事である。それから4年経った現在、日本の小学校の先生方の英語音声に対する意識と経験と実力と自信は向上したであろうか。4年(も)経った今も、現状はいささかも変わりない。そして、残念ながら、これから4年後の未来もこの現状は変わることがないと思える。8年から10年以上のスパンに亘って、日本人教員の英語音声面での改良が進まないという現実に、だれかがどこかで声をあげなければならない。声をあげるだけでなくて、実際に改良に努力しなければならない。その怠慢の犠牲者は子どもたちであるからだ。

現場で子どもに接する先生方の、英語音声に対

する不安は重要である。なぜかと言えば、子どもへの実際の英語音声教育に支障があるだけではなく、先生の英語に対するコンプレックスが子どもにそのまま受け継がれるという面でも是正が必要であるからだ。

小学校への英語教育導入に関しては、筆者は以下のように考えている。極端な言い方をすれば、いま日本の小学校英語教育は最大の危機に直面している。今、日本の英語教育に黒船が襲っていると言ってもよい。実は、過去に英語教育の黒船騒動は一度あった。30年ほど前の「平泉・渡部論争」といわれる事件である。どんな英語をどのように教えるべきか、という論争である。簡単に言えば、「これまでの日本の英語教育は、実用面を無視してきたので何の役にも立たない。だから日本人の英語の先生は全部辞めさせて、代わりに全員ネイティブの英語教員を全学校に配置すべきだ」という意見が英語教育界を揺るがせた。

二度目の英語教育への黒船は今である。小学校に本格的に英語が導入されつつある。これはもう避けることはできない。論争どころではない。現実に、初めて外国語を学ぶという大きな喜びと期待に胸ふくらませた子どもと、彼らに英語を教えなければならないが英語が得意でない小学校教員が矢面に立たされる。そういう小学校での英語の問題点を、発音クリニックの面から考えようとするのである。

小学校での英語授業で教えるべき方向性は、文部科学省から出された「英語ノート」[5]に詳しい：

はじめに――平成20年3月に小学校学習指導要領が告示されました。これにより、外国語活動が第5学年で35時間、第6学年で35時間の授業時間数が定められました。学習指導要領による外国語活動では、目標を「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の養成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力を養う。」としています。

これは、中学校学習指導要領の目標にある「コミュニケーション能力の基礎を養う」こととともつながり、また、中学校学習指導要領の配慮項目の第1学年における言語活動のなかにある、「小学校における外国語活動を通じて音声面を中心としたコミュニケーションに対する積極的な態度」などの一定の素地が育成されることを踏まえ、身近な言語の使用場面や言語の働きに配慮した言語活動を行わせることにもつながり、この小学校英語での方向性は、やがて中学校の外国語（英語）の指針へとつながってゆく。

性急に結論めいたことから述べると、小学校の現在の先生方に理想的な英語授業を実践することを期待することは、たとえば、英語担当の大学教授に来年からピアノの実習をせよ、というに等しい要求であるというのは言い過ぎかもしれないが、かなりの難題である。小学校の教員の英語力を客観的に評価した報告があるかどうか寡聞にして知らないが、想像するに、多くの先生方の悩みは、以下の2つの困難さに集約されるであろう：①英語の発音に自信がない。②英語の授業をどうやって考え・実施してよいか分からない、であろう。しかし、実際、大阪府下のB市やC市の多くの公立小学校での英語モデル授業を見た範囲では、②の「教案・授業」に関しては、あまり問題ではないと思える。すでに担任として自分の生徒達の学習レベルと授業態度を完全に把握している先生にとって、まったく新しい外国語教育も自らの創造的アイディアと実行力である程度こなしている例も少なくない。また、参考にできる市販の教材は選択に困るほど多く出回っている。さらに、インターネット上での各種の授業方法のサンプルや教材などの量も膨大である。

英語能力（これを、先生方は主に自分の文法知識と語彙数のことだとして心配しているが）、大学卒業までの合計 8 年前後の英語授業において学習・習得した英語力（文法と語彙）は想像以上に大きな蓄積である。これをもってすれば、小学校での英語授業をこなせないことはない。極端な話、市販のテキストや市販テキスト内の教案の実施で十分である。語彙も、小学校授業で使う単語と表現はごくわずかである。

Ⅱ．発音クリニックの概略説明

問題は、教授法や教案や文法や語彙や基本表現ではない。音声である。今回の「発音クリニック」に参加した 20 名の小中学校の教員も、音声面での確認と訓練の重要性を認識したうえで、この講座を受講している。それらの要求に応えるべく、具体的には第 1 回目の講義では：

①発音記号の重要性を説明する
②「基礎発音」として、[æ]、[θ]、[f]、[l]、[ʌ]、[ə] の 6 つの発音を 2 ヶ月に亘り自己訓練する
③講習の成果を確認するためにサンプル文を録音する
④最終回は自己録音 Before/After の自己分析をする

ことを柱とした。

拙稿で取り上げる小学校および中学校の現場で仕事をする英語担当者の音声面をサポートするこの企画は、以下のように計画され、実施された。講習は 3 回に分けて行われた。

第 1 回目は、参加者に対する発音クリニックの基礎知識と基本を講習した。同時に、短い英文を各参加者に朗読してもらい、それを音声データとして保存した。各自の音声データは FD や FM などのメディアに記録され、本人に郵送された。次回までの 2 カ月の間に各参加者は「宿題」として、英語基礎発音の自己訓練を行うことを要求され、その実施記録はカレンダーに記録してくることを求められた。

第 2 回目は、各参加者に対する基礎知識の再度の講習と、宿題実施の報告討論である。初回の説明で不明な個所や自己訓練の再確認も行う。初回の説明が時間不足の感も否めなかったので、再度、補強の意味で発音クリニックの基本姿勢を説明した。中間報告として、予定外であったが、再度、各参加者の英語発音を録音した。2 ヶ月間の自己訓練についてのアンケートを実施し、個人指導を行った。

第 3 回目はさらに 1 ヶ月後に実施した。最終回であるので、課題英文を再度朗読してもらい、それを音声データとして保管した。この音声データは FD または FM に保存し、各教員に郵送し、Before/After の自己分析を一週間後に完成して、担当者に返却することになった。

第 1 回目の基礎講習では、以下の発音（基礎発音）の説明を行うまえに、「発音クリニック」の概略の説明を行った：（以下の説明は、拙稿「英語発音訓練について――経験則の理論化と実践――」[6]からの再録である。

英語を「ネイティブ」と同じように話したり発音したりしたいという願いは、その善し悪しは別として、多くの学習者の素直な気持ちである。このような「自然」で、ある意味ではナイーブな欲求を、教える側や自己訓練をする側が適えようとするのも当然である。個々の発音を改良しようとする努力は、市販英語教材や教育現場でも絶え間なく追求されている。

しかし、英語の発音を教えたり、自己訓練法について論じ始めると、かならずといってよいほどひとつの、そして予想される反論がある。それは、「個々の英語発音よりももっと大切なこと

は、英語のリズムである。リズムがしっかり学習されていれば、個々の発音の訓練は不要であり、個々の発音を重視するのが瑣末なことである……」という意見である[7)]。

たしかに英語のリズムの学習は重要である。日本語と英語の基本的なリズムの違いを知らずに英語の発音を日本語式にすれば、それは「英語らしく」ないのは当然である。また、そのために英語の意味が伝わらないのは容易に想像できる。しかし、リズムの礎となる個々の発音が正確であれば、それだけリズムが安定するし、それだけリズムが正しく形成されるのは当然である。個々の発音をマスターしたから自動的にリズムが生まれて、英語がスムーズになるではないが、その基礎となるできるだけ正確な発音を習得してから、リズムの習得が必要である。当然、その逆（リズムを先ず学習すれば、そのあとに正確な個々の発音が身に付くということ）はありえない。

個々の発音とリズムとのどちらが大切かという問題ではなくて、順序の問題である。また、時間的な制約などから、どちらか先に学習者に教えたいというのであれば、それは順序の問題ではなくて、教授法の実践上の戦略であり、根本的な問題ではないし、だから個々の発音がいい加減でもよいということにはならない。

急いで付け加えるが、個々の英語発音の「正確度」の許容範囲は一般に思われているほど狭いものとは筆者たちは考えていない。World Englishes や Asian Englishes といわれるいわば異化された英語のバージョン[8)]においては、当然、表現も構造もニュアンスも「正統」英語とは異なるのは当然である。したがって、発音も、「教養ある英国人や米人」のそれと比較して同じであるはずがない。

しかしながら、標準から大きくはなれた発音の異種を話し手のアイデンティティーの核とする場合を除いて、普通の学習者が望むことは、できるだけ自分が模範としたい（ということは、普通の場合は選択した標準的な市販の英語教材）サンプルの英語発音であることが想像できる。

ここでわれわれが言いたいのは、いわゆる人真似の、「ネイティブ」の英語発音に学習者の発音を近づけるのではない。各自の発音方法の知識と知恵と情報を基礎にした自己訓練があれば、ある程度の発音は自己習得できるということである。とはいうものの、基礎発音の習得に一生を費やす必要はないし、そればかりに時間とエネルギーを費やすような学習方法を薦めているのではない。

基本は、自分の英語発音の幅のなかで「一貫した、再生可能なルールが遵守されて」いればよいのである。学習者固有の個々の個性は当然認められる。が、聞き手が、その発話者の（固有の）発音のルールをできるだけ容易に短時間に認識できればそれでよいと思うのである。

たとえて言えば、以下の説明で理解できるであろう。「赤字だったので、黒字にするためにワラジを売った」という例文を取り上げてみよう。[黒字]、[赤字]、[ワラジ] という発音は共通部分である音は 3 つとも同じに発音されるのが普通である。標準語でも、大阪弁でも、津軽弁でも、同様である。それぞれの方言や個々の発話者の発音形態と特徴のルールに沿って、[黒字]、[赤字]、[ワラジ] と発音される。もし、津軽弁の話者が他の方言（または標準語）で [黒字]、[赤字]、[ワラジ] の 3 つのうちいずれかを発音すると、聞き手はその選択になにかの意味があると思わざるを得ない。常識的な発話の場合、このような選択はありえない。

同じように、An African cat happily ran out of the bag. という例文を普通の初歩の英語学習者が日本語式に発話すると、一般的な傾向として cat 以外の語の [æ] は、日本語の「ア」に近い音で代用してしまう傾向にある。つまり、カタカナ表記にすると、「アン・アフリカン・[kæt]・ハッ

Fig. 3

[æ]	[f]	[v]	[l]	[θ]	[ð]	[ə]	[ʌ]	[ɔ, ɑ]	リエゾン	アクセント
cat ran bag happily									An African ran out	African
cat bag ran happily										
cat happily bag ran cat										
cat										
cat										

ピリ・ラン・アウト・オブ・ザ・バッグ」となる。

一貫したルールというのは、当然、cat の［æ］という発音と同じ発音を持つ他の単語のその部分も、同様に［æ］と発音されなければならない。これがルールである。その［æ］という音の幅は個人によって多少の差異があって当然である。［ワラジ］という音が地方の話し手や話者の個性のために日本中で同等であるはずがないのと同じである。イギリス英語式に発音する［æ］もあるであろうし、米語南部訛りの［æ］もあるであろう。日本語式の［æ］があっても当然である。が、日本語式の場合でも話者の cat［kæt］の［æ］と、その人の発話中の他の単語の［æ］音は同じでなくてはならない。

この単純な事実とルールを、できるだけ自分で意識して応用する訓練が重要である。あまりに単純なルールではあるが、実際に多くの初歩的段階に位置する英語学習者が見過ごしてしまうルールである。筆者の発音訓練の説明と実際のコツは、それぞれ、すでに学習者に流布しているものもあれば、その説明と実践方法の解説はかなりユニークなものも含まれる。が、すべてを学習者が真似する必要はなく、各自がある時期のある自分の学習ターゲットに沿った発音訓練を見つけて、実践すればよいと思っている。

紙面の関係上、この発音クリニック訓練でもっとも重要な「基礎発音訓練表」の説明を省かざるを得ないが、この点についても是非、拙論（「発音クリニック――小学校英語担当者の発音自己訓練法」、高村博正、大谷女子大学『紀要』35 号 1・2 輯、2001.）を参照していただきたい。とくに、Fig. 3 の表の利用の仕方がこの発音クリニックの核である。

Ⅲ．対象受講者の受講前の発音分析

上記のように説明したあと、各参加者に以下の英文のひとつを選択してもらい、朗読してもらい、IC レコーダに音声録音した。数種の英文サンプルを用意した理由は、各参加者の英語能力レベルに差異があるからである。小学校教員と、現場で毎日英語授業を担当している英語科教員との英語力は当然違うわけであるから、サンプル英文も数種類用意した。例文は：

①

An African cat happily ran out of the bag.

②

Welcome aboard Flight 152 to London. Our flight time will be 12 hours and 45 minutes. Please put your bags in the compartment above your seat or under the seat in front of you. After dinner, we will show you two movies. Thank you, and enjoy your flight.[9)]

③

So she went into the garden to cut a cabbage leaf to make an apple pie. And at the same time, a great she-bear coming up the street, popped his head into the shop and cried, "What! No soap!" So she died. And he very imprudently married the barber! And there were present the Jabalillies, the Garalillies, and the Great Pan Jum Drum himself with a little round button at the top, and they all fell to playing the game of catch-as-catch-can until the gun powder ran out of the heels of their boots.[10)]

④

Miss Kaori Kato of Miyagi Gakuin Women's College. She will be speaking on "The First Step to Internationalization." Miss Kato, please.

Hello, ladies and gentlemen, and all of the judges. What do you think when you hear an American say, "Before I came to Japan, I thought I'd need a Japanese sword to protect myself, just like the gun I have in America?" This is what an American entertainer

Fig. 1　2008 年度　小中英語担当者　発音クリニック　Before/Mid/After 自己分析表　　名前：

基礎発音	初回（Before）	第二回（Mid）	第三回（After）	→↑	自己分析コメント
[æ]	1－2－3－4	1－2－3－4	1－2－3－4		
	1－2－3－4	1－2－3－4	1－2－3－4		
[f]	1－2－3－4	1－2－3－4	1－2－3－4		
	1－2－3－4	1－2－3－4	1－2－3－4		
[v]	1－2－3－4	1－2－3－4	1－2－3－4		
	1－2－3－4	1－2－3－4	1－2－3－4		
[θ]	1－2－3－4	1－2－3－4	1－2－3－4		
	1－2－3－4	1－2－3－4	1－2－3－4		
[ð]	1－2－3－4	1－2－3－4	1－2－3－4		
	1－2－3－4	1－2－3－4	1－2－3－4		
[l]	1－2－3－4	1－2－3－4	1－2－3－4		
	1－2－3－4	1－2－3－4	1－2－3－4		
[ʌ]	1－2－3－4	1－2－3－4	1－2－3－4		
	1－2－3－4	1－2－3－4	1－2－3－4		
[ə]	1－2－3－4	1－2－3－4	1－2－3－4		
	1－2－3－4	1－2－3－4	1－2－3－4		
リエゾン	1－2－3－4	1－2－3－4	1－2－3－4		
	1－2－3－4	1－2－3－4	1－2－3－4		
アクセント	1－2－3－4	1－2－3－4	1－2－3－4		
	1－2－3－4	1－2－3－4	1－2－3－4		
自己評価合計					←上昇率（Before÷After×100）

talking on Japanese radio said the other day. It reminded me of some of my experiences in the United States.

I had opportunities to introduce Japan at school and church. After my introduction, many Americans came to ask me questions like, “Do you wear *kimono* everyday?”, “Do you eat *sushi* for every meal?”, “Is there running water in Japan?”, and so on. Can you imagine how surprised I was at such ignorance of Americans about Japan?[11)]

という 4 つの希望のサンプル英文を選択した。

前述のように、各参加者の発音はサンプル英文朗読を 3 回にわたって記録し、最終的には自己分析を行う。(Fig. 1)

それとは別に、筆者が個別に全参加者の 3 回の発音チェックを行った。(Fig. 2)

[æ]、[f]、[v]、[θ]、[ð]、[l]、[ʌ]、[ə] の 8 つの「基礎発音」と、単語と文章朗読中の「アクセント」と「リエゾン」の計 10 項目である。各項目を 5 点満点で評価した。

さらに、全参加者（A～T までの 20 名）の個別の文章による評価も行った。全体的に、当然のことながら、中学校の教員（英語科担当）の発音は「正確」であり、ほとんど大きな問題点がなかった。一方、これも当然のことであるが、小学校の教員の英語発音は全体的に「不正確」であり、多くの問題点を表している。専門の英語訓練を音声面で受けた経験が皆無であることを考慮すれ

Fig. 2

参加者名	小中区別	男女区別	[æ]			[f]			[θ]			[l]			[ʌ]			[ə]			リエゾン			アクセント			一回目評価%	二回目評価%	三回目評価%
A	小	女	4	4		1	1		1	2		1	1					1	2		1	3		3	2		31	40	
B	小	女	1	4		1	1		1	2		1	1		2	2		1	2		1	3		1	2		23	43	
C	小	女	1	3		1	1		1	1		1	1					1	2		1	4		1	1		20	37	
D	小	女	1	3		1	2		1	2		1	1					1	1		1	3		1	1		20	37	
E	小	女	1	1	2	1	1	3	1	1	2	1	1	2				1	1	2	1	2	5	1	1	4	20	26	40
F	小	男	3	4		1	1		1	1		1	1					1	1		1	2		2	2		29	34	
G	小	女	1			1			1			1						1			2			1			23		
H	小	女	3			1			1			1						1			3			1			31		
I	小	女	1			1			1			1						1			1			1			20		
J	小	女	1			1			1			1						1			1			1			20		
K	小	女	1	5	5	1	2	3	1	2	3	1	1	2				1	1	1	1	3	4	1	2	4	20	46	63
L	小	男	1	2		1	2		1	2		1	2		2	2		1	2		1	2		1	2		26	46	57
M	小	男	1			1			1			1						1			1			1			20		
N	小	女	3			2			2			1						2			3			2			43		
O	小	女	1	3	4	1	2	3	1	1	2	1	1	2				1	1	2	2	2	3	1	1	4	26	34	57
P	小	女	3		4	1		2	1		2	1		2				1		2	3		4	1		4	31		57
Q	中	女	4	5		2	2		2	2		2	2					2	2		2	5		2	3		46	60	
R	中	男	5	5	5	3	3	5	2	2	4	2	2	3				3	3	3	3	4	5	3	4	5	60	64	86
S	中	女	5	4	5	2	2	5	1	2	4	1	1	3				3	3	3	4	5	5	4	5	5	60	69	86
T	中	女	5	5	5	2	3	5	1	2	4	1	2	3				2	2	3	4	5	5	4	4	5	54	66	86

ば、当然であろう。個々の単語の個々の発音記号を知らないで発音しようとするのであるから、それはまったく当然である。講習の最初に説明をしたように、「一貫した（発音記号を遵守した）発音再生」を頭では理解できても、すぐにそれを実行に移すことはできない。最初の講習から2ヶ月のインターバル（この間に毎日10数分間の自己訓練を宿題として課せられている）の間に訓練をしていれば、第2回目の録音でかなりの上達が期待できるはずである。しかしながら、記録を見ると、やはりその上達度は期待ほどではない。これは多忙な教育現場等の事情があるものと思われる。

【個別コメント】：

A（サンプル文1、小学校教員）――小学校の先生としてはめずらしく［æ］の音が一貫して再生されている。しかしながら、of における［v, f］は「ぶ」で代用されているし、定冠詞 the の［ð］は、「ざ」で代用されている。さらに An African, ran out, out of におけるリエゾンはできていない。

B（サンプル文2、小学校教員）――After の［æ］，of や 45 の［f, v］がまったく一貫して再生されていない。しかしながら、above の［ʌ］は正しく再生されている。他の発音はすべて〈日本語式・カタカナ発音〉である。

C（サンプル文1、小学校教員）――An African のリエゾンができていない。of は「おぶ」と、日本語式である。定冠詞 the も同様に「ざ」で代用されている。全体のリズムも一本調子で、アクセントと抑揚に注意が向いていない。

D（サンプル文1、小学校教員）――An African のリエゾン、an African の［æ］がまったく意識して発音されていない。典型的なカタカナ発音である。［f］，［v］，［ð］の発音が再生されていない。

E（サンプル文1、小学校教員）――D とまったく同様で、An African のリエゾン、an African の［æ］がまったく意識して発音されていない。典型的なカタカナ発音である。発音の一貫性の必要性が理解はされているのであるが、実際の発音再生時にそれが実行されていない典型的な例である。とくに［f］，［v］，［ð］の発音が再生されていない。

F（サンプル文1、小学校教員）――An African のリエゾンは正しく実行されている。特に ran の［æ］が正しく発音されている。問題は一貫してこの発音が再生されているか否かである。An African の［æ］は意識されているが、実際の発音では再生されていないし、happily の［æ］が不正確である。定冠詞が典型的なカタカナ発音である。［f］，［v］，［ð］の発音が再生されていない。

G（サンプル文2、小学校教員）――An African のリエゾンは実行されている。しかし、an African の［æ］がまったく意識して発音されていない。とくに定冠詞の子音は典型的なカタカナ発音である。African, of の［f］，［v］，の発音も再生されていない。

H（サンプル文1、小学校教員）――An African のリエゾンがまったく実行されていない。ran, happily, An, African の［æ］がまったく――他のメンバーと比較すればかなり意識はされているのであるが――正確に発音されていない。典型的なカタカナ発音である。［f］，［v］，［ð］の発音が再生されていない。

I（サンプル文1、小学校教員）――極端な、そして自意識過剰なせいであろうか、羞恥心のためであろか、過剰なまでの典型的なカタカナ発音である。基礎的な発音訓練を受けたことがないか、または「意識的に」カタカナ式発音を展開している。学生たちの場合もこの種のカタカナ式発音を行う例がまれではない。できるだけ指示通りに正確に英語音を再生しようとしているのであろうが、そのまじめな意識が極端な日本語式発音に移転してしまうのかもしれない。当然のことである

が、すべての音は英語の音ではなく、リズムもアクセントも抑揚もリエゾンも実行されていない。

J（サンプル文1、小学校教員）——cat の［æ］を「カット」と発音した唯一の例である。非常に希な例であろう。典型的なカタカナ発音、日本語式発音であるが、これほど強調してカタカナ式（それもキャットをカットと発音するのであるから非常に特異）で発音するという異色な発音例はいままでに聞いたことがない。「キャット」ならまだしも、「カット」と「意識的に」発音するのは何か他の要因があるに違いない。

K（サンプル文1、小学校教員）——African を American とミス発音した例であるが、American には［æ］の発音が含まれていないので、このターゲット発音の練習にはならない。リエゾンもアクセントも抑揚も意識されて再生されていない。

L（サンプル文2、小学校教員）——above の［ʌ］のみ正確に発音されているが、それに比して London, front, one, の［ʌ］がまったく一貫して発音されていない。短時間の講習と練習時間しか取れなかったので、完全に再生されることは期待されないが、意識はされているようである。bag の［æ］も一貫していない。

M（サンプル文1、小学校教員）——an, African, happily, bag もすべて cat［æ］と異質の音として再生されている。一貫した発音の必要性は了解・理解していながら、実際の再生においては意識どおりに筋肉が動かない例が多々ある。その訓練（意識の実行）がこの発音クリニックの主眼である。

N（サンプル文1、小学校教員）——この参加者は発音クリニック受講を過去に経験している。したがって、発音クリニックの基礎知識を十分に把握している。実際の小学校での英語研修授業においても発音クリニックの成果を実行した教員である。それだけに今回の発音練習録音（before）ではかなり上達して再生している。しかしながら、丁寧に各発音を正確に再生しようとすればするほど、文全体のリズム・流れ・リエゾン・抑揚が犠牲になってしまっている。しかし、これも上昇してゆく訓練成果の一段階である。African のアクセントがずれている。

O（サンプル文1、小学校教員）——典型的なカタカナ発音である。過剰ではないが、まったく英語音声体系にそった発音ではない。このような「中途半端」な英語発音の実行者の矯正がこの発音クリニックの目的のひとつである。つまり、このままでも普通の日本人の先生の英語発音であるから、それだけにさらに上達させなければならない「必要性」をどこかの機会に本人に徹底させなければならない。極端に「下手で・不正確」な発音なら矯正の必要性は本人も周囲も認識できるが、上記の場合は曖昧で複雑である。

P（サンプル文1、小学校教員）——これも典型的なカタカナ発音である。すでに講義のなかで発音記号にそった一貫した発音の必要性を伝えてあるのであるが、それを短時間で習得することと実践的に再生するのは易しくはない。自分の発音を録音で確認してみれば、発音が一貫していないことがかならず認識されるであろう。この段階を踏まないと上達はしない。

Q（サンプル文1、中学校教員）——中学英語科教員である。さすがに正確な発音であり、一貫していて問題はない。あえて言えば、of の［v, f］をもう少し正確・丁寧・強調して発音されれば、この教員に英語発音を学ぶ生徒は安心であろう。しかし、全体としてこの受講者の英語発音は問題がほとんどない、モデルになりうる発音である。中学校のすべての英語教員がこのような状態であればよい。

R（サンプル文1、中学校教員）——中学英語科教員である。さすがに正確な発音であり、一貫していて問題はない。丁寧・強調して発音されれば、この教員に英語発音を学ぶ生徒は安心であろ

う。あえて言えば、of の［v, f］をもう少し正確・丁寧・強調して発音されればよい。が、しかし、全体としてこの受講者の英語発音は問題がほとんどない、モデルになりうる発音である。中学校のすべての英語教員がこのような状態であればよい。

S（サンプル文 1、中学校教員）――中学英語科教員である。さすがに正確な発音であり、一貫していて問題はない。丁寧・強調して発音されれば、この教員に英語発音を学ぶ生徒は安心であろう。あえて言えば、of の［v, f］と定冠詞の［θ, ð］をもう少し正確・丁寧・強調して発音されればよい。同時に、African のアクセントがすこしずれる点がおしい。定冠詞の子音ももっと正確に再生してほしい。しかし、全体としてこの受講者の英語発音は問題がほとんどない、モデルになりうる発音である。

T（サンプル文 1、中学校教員）――中学英語科教員である。さすがに正確な発音であり、一貫していて問題はない。リエゾンも完璧である。このように正確・丁寧・強調して発音されれば、この教員に英語発音を学ぶ生徒は安心であろう。あえて言えば、of の［v, f］をもう少し正確・丁寧にしてほしい。が、しかし、全体としてこの受講者の英語発音は問題がほとんどない、モデルになりうる発音である。中学校のすべての英語教員がこのような状態であればと思う。ただ、さらなる上を目指すならば、自分で発音できていると思っていても実際に他人の耳にどういう音で聞こえているかを再確認することはプロとして必須の作業・訓練である。録音を聞き直してほしいものである。

発音評価の基準は、①発音記号に準じた（個人差は当然あり）一貫した再生ができているか、②文全体の当該発音が一貫して発音されているかに重点を置いた。

Ⅳ．まとめと受講者のアンケート

過去に行った本学や関西大学での発音クリニック授業の成果は教育的な成果が大きかった。今回の A 市立小学・中学校のケースも同様である。上記のような簡単なルールの実際的な応用が、結果として受講者の個人個人の英語発音の上達に大きな成果を生み出している事実に、学習者自身が驚いている場合が少なくない。

大阪大谷大学での実験では、一年後の After 録音後、両者を再度比較して聴いたあと、After の録音について前回と同様の自己分析・評価を記入する。5 段階評価は数量化（100% 換算）し、数字で比較して、Before と After の点数をみると、全体として約倍増した点数となるのが普通である。この数量化はかなり荒っぽい算出方法ではあるが、学習者は自分の発音上達成果に驚嘆するのが普通である。自己採点表を提出させるときに、用紙の余白に（強制ではない）書く自発的なコメントには、ほとんどが自分の発音上達に喜びと感動を記録しているのが普通である。42 名の受講者（2003 年度の場合）内、45% の受講者が「非常に上達したことを実感している」と述べており、54% の受講者が「上達を確認した」と報告している。全員の学生が自分の発音上達を確認し、同時にこのシステムの重要性を認識し、さらに将来における自己訓練とその発展性に期待をしている。

今回の A 市の場合、参加者のアンケートの一部は示唆に富んでいる。とくに、英語音声面での不安が大きく全面に出ている。さらに、小学校での英語教育に担当する可能性がある教員として、大きな不安感をもっていることが読み取れる。以下はそのアンケートの一部である：

【問：今回の講習を受けた理由】

・これから小学校で英語が始まるので、子どもたちに正しい発音で授業ができるように
・小学校に英語教育が導入されるため
・英語の担当者として
・小学校で英語教育が始まるから

【問：英語の発音に自信があるか：1 ない～5 ある】

・2
・1
・1
・3
・1
・1

【問：英語の発音に対してどのような不安をもっているか】

・カタカナ発音で発音してしまうので、正しい発音がわからない
・耳で聴いて覚えているので、それが正しいのかどうかわからない
・発音記号をみても、それをどう発音してよいかわからない。単語をみても発音記号がわからないものが多い
・自分の悪い発音が子どもに悪い影響を与えないかどうか

【問：小学校への英語教育導入をどう思うか】

・他の教科があるため、むずかしいのではないか
・あまり必要ではないのではないか
・短い時間でたくさんのことを詰め込むのはよくない。内容を精選し、きちんとした授業研究をすべき。余裕がないので形だけになるのではないか
・あまり賛成ではない。日本語教育に力を入れるべき
・英語の知識がないのに小学校教師が教えられるのか？英語ぎらいを小学校で作ってしまうのではないかと心配

以上のように、現場で実際に子どもたちの教育に携わっている教員にとって、小学校での英語教育はいくつかの緊急で普遍的な問題点をもっている。とくに小学校で英語を教えなければならない必然性が依然として曖昧である点（現場の教員の意識の覚醒）と音声面での不安である。こうした現場の現実的な悩みを個々の教員はみずから今回のような発音クリニックを受講することなどによって、自主的に解決しようとしている。先生がたが A. E. T. や A. L. T. に任せることなく、また CD や DVD に頼るのではなく、自分たちのできる範囲で子どもに英語を教えるしかない。自分たちができる範囲の音声面での訓練は絶対に必要である。今回の A 市の先生方の意識の高さと熱意に多少なりともサポートできたことは大きな喜びであるが、同時に、A 市の教員をさらにサポートしてゆこうという同市の教育委員会の姿勢を感じた。今回の講習に、忙しい合間をぬって参加してくださった全員に記して感謝する。

注

1）高村博正、「発音クリニック――小学校英語担当者の発音自己訓練法」、『大谷女子大学紀要』35, 2001.
2）高村博正、「教師を育てる生徒たち――A 中学校における実験的英語発音クラスの報告」『教育福祉研究』31、大谷女子大学、2005.
3）朝日新聞、「がっこう 2004」、英語教育③、平成 16 年 7 月 15 日、14 版、33.
4）鳥飼久美子、「多言語・多文化進む日本社会」グローバル化の正体　@コミュニケーション opinion 朝日新聞　2008 年 5 月 26 日 10 版。
5）『英語ノート：指導資料－第 5 学年』（試作版），p. 2，文部科学省、2008.
6）藤上・高村「英語発音訓練について――経験則の理論化と実践――」『大阪大谷大学教育福祉研究』30、2004.
7）松川禮子、『小学校英語活動を創る』高陵社、2003、p. 32.
8）本名信行、『アジアをつなぐ英語』アルク、1999、pp. 2–3.
9）TOTAL ENGLISH（New Edition）2、学校図書、平

成 15 年、pp. 31.

10）百万人の英語『小林克也の「発音」からの英語訓練法、“English-My Way”』、日本英語教育協会、1986.

11）加藤　薫、毎日杯英語スピーチ大会原稿（年度不明）

参考文献

1．『入門ことばの科学』田中春美他　大修館書店、2000.

2．『英語発音おもて・うら　上達への体験的アドバイス』高倉忠博　新風舎、2003.

3．『なぜ子どもに英語なのか――バイリンガルのすすめ』唐須教光、NHK ブックス 956、2002.

4．『アジアをつなぐ英語』本名信行、アルク、1999.

5．『小学校英語活動を創る』松川禮子、高陵社、2003.

6．『総合的な学習「国際理解・英語活動」の具体的な展開』東京都文京立誠之小学校編、2001.

7．『困難な状況のもとにおける英語の教え方』マイケル・ウェスト著、小川芳男訳、英潮社、1968.

8．「発音クリニック――小学校英語担当者の発音自己訓練法」、高村博正、『大谷女子大学紀要』35 号 1・2 輯、2001.

9．「英語発音訓練について――経験則の理論化と実践――」、藤上／高村、『教育福祉研究』30 号、大谷女子大学教育福祉学科、2004.

10．「英語による効果的なプレゼンテーションと相互評価――連続性．発展性の視点から――」、大倉／高村／奥田、『教育福祉研究』30 号、大谷女子大学教育福祉学科、2004.

11．『日本人学生の英語プレゼン能力向上の研究――科研「萌芽研究」を踏まえて――』、大倉／高村／奥田、2008 年.

12．「教師を育てる生徒たち――A 中学校における実験的英語クラスの報告」、高村博正、『教育福祉研究』31 号、大谷女子大学教育福祉学科、2005.